

4 三国・両晋・南北朝の佚亡医書に見られる灸法記載

川端かおり

日本鍼灸研究会

中国の三国・両晋・南北朝の医書には佚文によってしかその内容をうかがい得ないものが少なくない。以下、この時期の鍼灸研究の一環として、佚亡医書の灸法記載を検討した（『小品方』は除く）。底本には『三国両晋南北朝医学総集』（敵世芸〔等〕主編，人民衛生出版社，2009）を使用した。

『華佗鍼灸経』は、『隋書』経籍志に『華佗枕中灸刺法』一卷，『医心方』に『華佗鍼灸経』『華佗法』などとする引用が見える。灸刺の禁忌（「冬至，夏至，歳旦，此の三日の前三，後二，皆な灸刺及び房室せず」）を挙げるほか，卒死（両足大指爪甲聚毛中），卒中悪（足両拇指上甲後聚毛中），尸厥死（両足大指甲後叢毛内），鬼魔（両足大趾叢毛中），胃反（両乳下三寸），卒疝，五勞羸瘦（足大指去甲五分内側白肉際）に灸法，脳空穴（灸三壯）と乳根穴（灸五壯）に壯数の記載が見える。

『曹氏灸経』は、『医心方』『太素』『千金要方』に佚文がある。12穴（玉沈，維角，睛明，舌根，結喉，胡脈，天突，神府，臣攬，関元，足太陰，丘墟）に「無病不可灸。・・有疾，可灸○壯」の体例で灸法が見える。

『范汪方』は、『外台秘要方』『医心方』に大量の引用があり，『千金要方』『証類本草』にも引用が見える。摔斃不覚（両足大趾聚毛中），心疝（両足大指甲肉之際，足心，足大指甲後横理節上，大指岐間白黒肉際），黄疸（臍上下両辺各一寸半），中風口僻噤（肘頭），中風舌強（廉泉），陰頰（両足大指外白肉際陷中），疣目（疣目上灸之）の灸法のほか，猝死，摔癩では布で灸点を量る方法も見える。また，人気の所在で灸刺を禁ずる記載もある。

『集驗方』は、『外台秘要方』や『肘後備急方』『千金要方』『張文仲方』『医心方』などに大量の引用がある。「凡そ癰疽の疾，・・上に当て灸すること三百壯，四辺の間に灸すること各おの二百壯」との記載が見える。

『刪繁方』は『隋書』経籍志に「『刪繁方』十三卷」とある。『千金要方』『外台秘要方』『医心方』に多くの引用がある。転筋に対する5例の灸法条文が見られる。指の攣急に手踝上に，脚の攣急に母趾に施灸する。

『産経』は、『隋書』経籍志に「『産経』一卷」，『日本国見在書目録』に「『徳貞常産経』十二卷」とある。佚文の全てが『医心方』に見える。小児の陰癩（「陰頭を牽き正しく上行させ，灸頭の極むる所に灸す。又た，牽きて下行させ谷道に向け，極むる所に灸す。」），白利（「足内踝下骨際三壯」），疣目（「疣上三壯」）に灸法が見える。『医心方』には同著者の『徳貞常方』の佚文も見え，張口不合（通谷），牙齒痛（浮白），積聚（第十三椎節下間，上管穴，胃管穴，水分穴）に灸法が見える。

『新録単要方』は中国の目録に記載が無く，『日本国見在書目録』に「新録軍（ママ）要方五，魏孝澄撰」とある。『医心方』に「新録単要方」「新録単方」「新録要方」「単要方」などの書名で引用される。陰痒（脊窮骨，足大指叢毛中），氣噎（臆中），宿食不消（大倉穴，臍左右相去三寸〈名魄舎〉，第五椎并左右相去一寸五分），噦方（腋下一寸），寒疝（乳下一寸，足大指叢毛，臍上三寸〈名太倉〉，臍下二寸〈丹田〉），上腕，窮骨上一寸，脊中，酒瘕（膀胱俞），水癖（桃人准上），雜利（脊中，脾俞，大腸俞）大便雜方（胃脘），諸徹（太倉〈中管〉，乳下一寸），蝎螫人（艾灸上），無子（中極），小兒解顛（臍上下半寸），飲食過度（胃脘）に対する灸法が見られる。

『龍門方』は『医心方』に佚文がある。脚転筋及入腹（脚心急筋上）婦人滯下（臍左右各一寸半），微咽方（両乳中間）への灸法のほか，大赤眼，卒死では繩を使った灸法が見える。

『耆婆方』は『医心方』に佚文があり，足腫（外踝尖）の灸法が見える。

『金騰灸法』『僧匡鍼灸経』は『医心方』に佚文があるが，背部俞穴を述べるも，灸法の記載は見られない。